

ワンポイント知識（ティラー編）

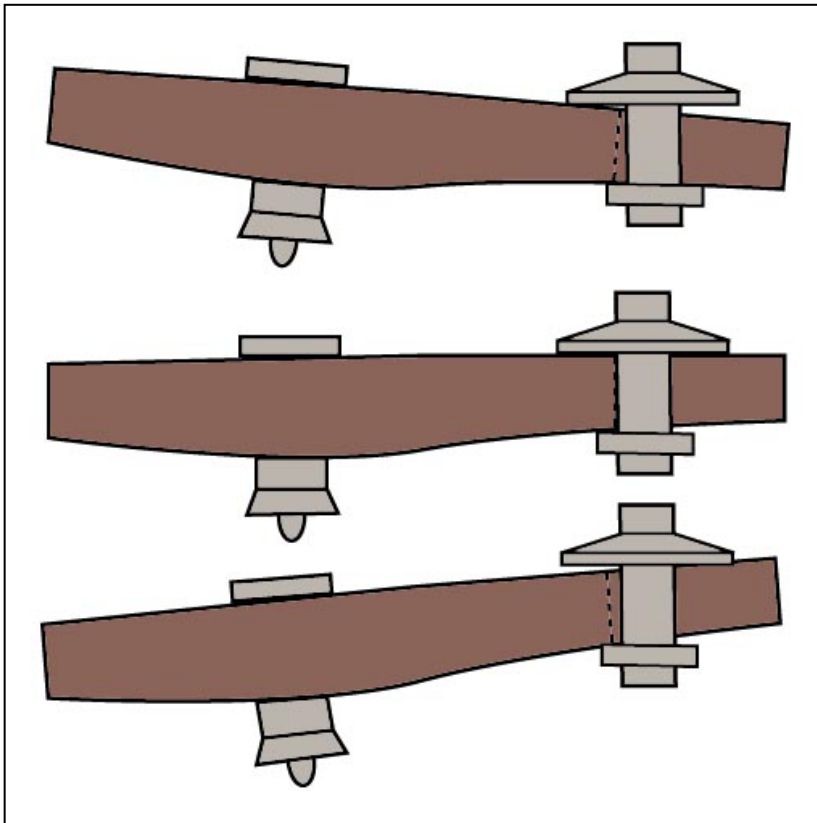
ティラーアジャスターについて

高性能なリカーブボウには、ティラーアジャスター装置が内蔵されるのが当たり前になってきました。しかし、この装置の使い方にはかなり誤解があるようです。

本来、この装置は上下のリムバランスを調整するためのものでポンドを調整する機構ではありません。

精度の高い的中を実現するためには、リリースの時に、ストリングがノックを上下に揺れ動かずに真っ直ぐに押ししてくれるリムバランスを発見することが必要です。

このバランスは一律のものではなく、アーチャーの射法、グリップやとりかけのスタイル、リムの個性により異なります。ティラーアジャスターはこれらの組み合わせ要素を補正してノックを真っ直ぐに押せるように調整する目的で開発されたものなのです。



ところが、これを操作するとポンド数が変化してしまうことも事実です。しかし、これはあくまで「副作用」と考えてください。

初心者のうちは弱いポンドで使い、上級者になったらポンドアップするための装置ではないのです。

そのように使い方をすれば、性能が充分発揮できないのはもちろんのこと、最悪の場合には弓具の破損も引き起こしかねません。リム

とハンドルライザーの接合部分がマッチングする範囲はそれほど広くはありません。例えば、HOYTタイプのリムセットスタイルの場合、アジャスターの円盤とリムが面接触する位置(最も振動も少なく、性能も発揮される位置)限られています。締めすぎても緩めすぎてもリムと円盤の接地面積が小さくなり振動やリムのうねりの原因になってしまいます。まず、円盤とリムが面で接触する位置にセットした上で、それぞれの個性にあったリムバランスを発見してください。

さて、「副作用」でポンド数が変化してしまうと説明いたしましたが、これは悪いことばかりではありません。

ポンド数の変化はリムがアローに与えるエネルギー量も変化することを意味します。

つまり、ポンド数を変化させることによりクッションプランジャーだけでは調整できなかったアローの「たわみ量」を積極的にコントロールすることが可能であるということです。尚、これはあくまでスパインがある程度適合している条件下での「微調整範囲」であることをお断りしておきます。

ポンド調整機構

さて、ヤマハのようにスペーサーの厚さを変化させることでポンド数が変更できるタイプも存在します。

このタイプの弓の場合、スパインの選択に注意が必要です。

例えばヤマハの弓の場合、一番厚いNo. 1 スペーサーの使用を前提に設計されています。最も薄いNo. 3 スペーサーを使用して40ポンドになったセットと、No. 1 スペーサーで40ポンドになったものとはスパインの選択方法は変わってきます。

前者の場合、リムのテンションと動作が不十分なため後者に比較して十分な性能が発揮出来ません。アローに必要なたわみを充分与えることが出来ないため、そのままの条件でスパインを選択してしまうとかなり固いアローを選択してしまうことになります。

もし、弓の性能を十分に引き出したいのであればNo. 1 スペーサーの使用(最低でもNo. 2のスペーサー)が必要です。

諸事情でNo. 3 スペーサーを使わざるを得ない場合には、実質ポンドが40ポンドであっても3ポンド以上ダウンさせた35 - 37ポンド換算でアローを選択しないと例外なく失敗します。(この数値は諸条件により異なります。一律のものではありません。)

No. 3 スペーサーの使用は筋力がつくまでのつなぎと考えてください。

適正なりムバランス

簡単に適正なりムバランスを発見するためには、サイトやスタビライザーをはずしたベアボウの状態でシュートしてみることをお勧めします。ティラーアジャスターを利用してリムバランスを変化させ最も振動が小さく、弦音が静かな位置を発見してください。

矢飛びや長距離での矢伸びが大幅に改善されるはずです。

